のぞいてみよう！せんだいの歴史　ゆかりの絵画編

奥深い「扇面図屏風」の輝き

仙台市博物館　学芸企画室　黒田 風花

第16回

「扇面図屏風」とは？

本図は、仙台藩初代藩主・伊達政宗の頃に藩政の中心として機能した仙台城本丸大広間の障壁画だったと考えられる作品です。もとは建物の壁面に描かれていたものを、後に屏風に仕立て直したものとみられます。背景の地には銀箔を散らし、花が咲いた植物と扇が描かれます。いくつもの扇が花畑を舞うかのように、画面全体に散っています。扇面には富士山や菊、貝、ウリなど、1面ごとに異なる絵が彩り豊かに描かれています。

銀はどこにある？

今回は本図の主題である扇ではなく、背景の地に注目します。紙の全体に銀箔が豪華に散らされています。小さな四角形の切箔（銀箔を小さく切ったもの）と、粒のように細かくした箔を散らす砂子という技法であらわされています。

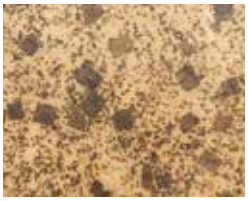
しかし、写真を見ても実物の資料を見ても、背景は銀色に見えません。黒色の点のように見えるものが銀箔または銀箔の痕跡です。銀は硫黄と反応し硫化銀となることで黒ずみます。空気中にも硫化水素などの硫黄化合物が含まれているため経年変化で銀が黒色になることもありますが、銀の硫化を利用してはじめから鈍色に光らせた美術品もあったようです。

どう輝いたのか？

本図は、大広間の中でも御帳台の障壁画だったと考えられます。御帳台とは広間の最も奥、藩主が座す上段の間と呼ばれる空間に接する小部屋です。上段の間とは重厚なふすまで仕切られ、残りの3面を壁とすることが一般的です。ふすまを開けなければ自然光は入らず、広間を用いる際はふすまが閉じられているため、くらすみ（暗闇）の間とも呼ばれました。

仙台城のような国持ち大名の城、またはそれ以上の城では、政治の表舞台として機能する広間の表側はきらびやかな金箔地に極彩色の障壁画で飾られました。同じ建物内でも城主が日常を過ごす裏側は、華やかながらより素朴な着色画や墨絵などが用いられました。しかし仙台城の場合、裏側には本図のように銀箔を散らした障壁画が用いられました。

本図に見える黒い銀箔が、経年変化で黒化したものか人工的に作られたものか、現時点では分かりません。色鮮やかな扇面に負けないほど輝く銀だったかもしれませんし、扇面や草花を際立たせるいぶし銀だったかもしれません。いずれにせよ、上段の間から漏れる自然光、または暗闇の中の燭台のかすかな明かりで照らされた扇面図は、金色とは異なる味わい深い輝きを放っていたことでしょう。



（写真上）宮城県指定文化財
扇面図屏風　6曲1双のうち1隻
仙台市博物館蔵
（写真左）部分拡大
大きな黒い片が切箔、細かい粒が砂子

今回紹介した作品は仙台市博物館ホームページの「収蔵資料データベース」からご覧いただけます。

重要美術品　萩に鹿図屏風(左隻)　展示期間:11月5日～12月21日

2025年
秋の常設展
12月21日(日)まで開催中

仙台市指定文化財　水玉模様陣羽織
展示期間:11月18日～12月14日

仙台市博物館
SENDAI CITY MUSEUM

詳しくは博物館ホームページをご覧ください。

〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地〈仙台城三の丸跡〉
【観 覧 料】一般・大学生460円、高校生230円、小・中学生110円
【開館時間】9:00～16:45(入館は16:15まで)
【休 館 日】毎週月曜日(11/3、24は開館)、11/4、25
TEL:022-225-3074　博物館X:@sendai_shihaku